

震災から五年を経過した

東北から

1

一万八〇〇〇人以上の死者・行方不明者という甚大な被害をもたらした東日本大震災。二〇一六（平成二十八）年三月十一日で五年が経過した。五年前の「あの日」、多くの方々の生活が一変した。あれから五年、被災地は「今」どのような状況なのか。被災地の「今」を伝えることで、「これから」を考えていきたい。

スタート地点

震災から五年を経過した今、私たちは

どういふところを、あるいはどういふ気持ちを持ちスタート地点とすればいいのだろうか。メディアから、記憶から震災が薄れていることを即座に否定することは難しい。だからこそ、ここで一度スタート地点を確認してみたい。

東日本大震災を契機として設置された復興庁によって、「全国的に東北を思い返し、子どもたちの目から見た復興の姿や、新しい東北への思いを共有することにより、風化防止を図ることを目指して」実施された「新しい東北——作文コ

ンテスト——」に入賞（優秀賞）した作文が復興庁のHPに掲載されている。中学生の部にこんな一節がある。少し長いが引用する。

震災があった日から五年間。振り返ってみると、一つ言えることがある。それは、実際に現地に赴くことの大切さだ。それが、ボランテアという形か、観光であるかは関係ない。最近日本に浸透しつつある、大きな誤解をなくしていき、より多くの人が被災地に興味を持つことが大切なのだと思う。五年経った今、必要なのは物資でなく、心だ。人の心は人でなくては治せないし、癒やせない。現在は交通も整備され、東京、東北と言えど離れてはいない。足を運び、同じ日本人として、一緒に復興していくぞ、という心を持った人が、日本中に集まればいなどと思う。

五年も経過しているのだから、メディア報道が減少しているのだから、被災地

は復興しているのではないかと考えていた作文の筆者は、実際に現地に赴いたことで、「稲妻が落ちたかのような衝撃が走った」と書いている。筆者が必要だと言った「興味」や「心」を、現在の私たちは持っているのだろうか。専如ご門主は、『ありのままに、ひたむきに 不安な今を生きる』（PHP研究所、二〇一六年九月）の中で、「日常生活を送っていると問題に気づかず、見えてこない部分」というのはやはりあります。その『見えないうところを見よう』とする姿勢が必要です」（三三頁）と仰おっしゃっている。私たちには、見えていない部分があるのではないか。何かを見ようとしていなかったのではないか。こうした思いを今の「スタート地点」としたい。

東北教区災害ボランティアセンター

浄土真宗本願寺派が東日本大震災以後から活動を行うセンターに、東北教区災害ボランティアセンター（以下、ボラセ

ン）がある。ボラセンは、震災の混乱が続く二〇一一（平成二十三）年三月十七日、本願寺仙台別院に設置された。設置以来、のべ三万人以上の方々とともにボランティアを続け、現在の主な活動は、地域支援活動（仮設住宅集会所や仙台別院教化センターでのお茶会）、協力団体における活動（写真洗浄活動、行方不明者捜索活動、居室訪問活動など）、所内活動（施設の環境整備など）である。

ボラセンが中心的役割を担になう活動であるお茶会は、二〇一一年六月末から「地域自立支援」を目的として、継続的に開催されている。「世界でも類を見ない超高齢社会に突入している」（総務省）と言われる近年の日本では、地域・コミュニティの重要性や、コミュニティ再構築の必要性が主張されている。また、内閣府の調査（平成二十六年版防災白書）によれば、地域コミュニティにおける相互の助け合いが復興に重要な役割を果たしたという。そうした地域コミュニティに深く関わる活動がお茶会である。家の玄

関、駅のホーム、スーパーの売り場などで顔を合わせ、話をする。そうしたごく当たり前の「日常」が、震災によって失われ、しかも、生活環境が著いちじるしく変化する避難生活では「日常」を取り戻にくい状況がある。お茶会は、仙台別院教化センターや、仮設住宅集会所で、その「日常」をつくり出す役割を担うことで新たなコミュニティ形成を支援している。

ボラセンと協力団体における活動の一つに居室訪問活動がある。居室訪問活動は、仮設住宅を訪問し、震災にあわれた一人一人の声を聴く活動である。本願寺派総合研究所が自死・自殺問題に関わってきた蓄積や経験をもとに、実際の活動と共に現地ボランティア養成講座を開催しながら、現地の方々と継続している。また本願寺派は、震災被害が東北の中でも甚大であった陸前高田市に、現地相談員の一人西條正夫氏より申し出のあった土地を借り受け、ボランティアセンター出張所「とまり木」を開設している。居

室訪問活動を記録した『ボランティア仲間』(同文館出版、二〇一三)には、居室訪問活動が「縁・つながり」の再生に関わることを次のように言っている。

対話の中で、相手をそのままに受け止めていく事態が起きると、「縁」、すなわちつながりが再生されてくる。「聴く」とは、目に見えない「縁」を実感するためにある。人間にとって孤独は、絶望に限りなく近い。だから、「縁」が確認されていく必要がある。

(二七頁)

東日本大震災の避難者約一七万四〇〇〇人のうち、約二万八〇〇〇人がいまだ仮設住宅で生活されている。「絶望に限りなく近い」孤独に寄り添う活動として、居室訪問活動は、今後も継続していくことが求められている。

「縁」——つながり

全国社会福祉協議会のまとめによれ

ば、東日本大震災以後、二〇一六(平成二十八)年七月三十一日までに、岩手・宮城・福島県の三県で活動されたボランティアは、約一五〇万人にのぼる。ボランティアの一人一人がどのような気持ちで被災地へと赴かれたのかはわからないが、水俣病研究の第一人者である原田正純氏(一九三四—二〇一二)が「水俣病を見てしまった責任」と言われることが

関係するように思う。原田氏は、熊本大学の学生であった頃、水俣病の現地調査員の一員として水俣病が発生していた漁村を訪ねられた。そこで見た患者や家族への差別や貧困に苦しむ姿が、水俣病に生涯関わり続ける出発点だったと言われている。震災の被害を見てしまった、震災を経験してしまったものとして、何かできることがあれば、何かしなければ、といった思いから様々な方がボランティアとして活動され、そうした活動だからこそ、多くの方々が色々な形で「震災」に関わり続けることができるのだと考えられる。ボラセンが協力する団体を紹介

することで、そうした活動の一面をお伝えしたい。

震災から一年後の二〇一二年三月に設立された「おもいでかえる」(二〇一四年三月から法人化し「特定非営利活動法人おもいでかえる」となる)という団体がある。流出物の中から一般の方や自衛隊の方が見つけた写真や賞状などを預かり、洗浄・復元・保管の作業を行い、持ち主に返却するという活動を行っている。水に濡れ、泥をかぶったアルバムから写真を取りだし、洗浄することは困難な作業であり、専門的な作業であることが予想される。では、なぜそうした作業が可能となったのか。それには、「写真救済サミット」を実施している富士フィルムの協力があったとお聞きした。専門的な知識とボランティアの経験がともに、一枚でも多くの写真を持ち主に返したい、との思いでつながることで、個人や企業という枠を超えた成果を生み出している。同じように活動する団体に、名^な取市^{とり}関^{かり}上^{あがり}地区で行方不明者搜索活動を行

うSTEPがある。震災から時間が経過するごとに、捜索活動は困難を極める中、STEPでは、東北大学、仙台高等専門学校が開発、所有するレーダを学生とともに用いながら捜索活動を行っている。ここにも「何ができるか」という思いがつながりながら、人それぞれが自分たちができる活動を行っている。

復興への思いとこれから

ビートたけしさんは震災直後に、「私たちの想像力」の大切さを訴えている。その際、たけしさんは、単に「数字」で判断する危険性を、東日本大震災の被災者二万人と二〇〇八年五月に起こった四川大地震の被災者八万人とを比べて、私たちがどう受けとっているのか、という問いかけを行いながら次のように言っている。

人の命は、二万分の一でも八万分の一でもない。そうじゃなくて、そこには

「一人が死んだ事件が二万件あった」
ってことなんだよ。

災害を含めた事故や事件が起こった際に、私たちは何人、あるいは何万人が被害にあった、日本人の被害者はいなかった、などの言葉を聞く。しかし、そうした「数」を聞いた時、私たちは被害を受けた「一人一人」へ本当に心を向けているだろうか。たけしさんは「想像力」の必要性を訴える。想像力をはたらかせて、大事な、親しい、かけがえない存在を失った人（一人）が、何人もいるんだと考える。東日本大震災を念頭にたけしさんは、「二万通りの死に、それぞれ身を引き裂かれる思いを感じている人」がいることを忘れてはならないと言われているのである。

「一人」と向き合い続けること。困難な道である。しかしながら、その困難な道を歩み続ける方々は今でもいらつしやり、本願寺派、ボラセンの活動もその一つであることを目指して継続的に活動し

ている。

しかし、震災から五年という月日の経過は、多くの問題も生み出し、活動も新たな視点からの見直しが求められている。こうした点については、次号で紹介いたします。

本願寺派における東北地方での活動については、

・本願寺HP「東日本大震災における本願寺の取り組み」(<http://www.hongwanji.or.jp/project/saiga01.html>)

・東北教区ボランティアセンターHP (<http://otera-vc.jindo.com/>)

・総合研究所HP「東日本大震災被災地での活動報告」(http://j-soken.jp/category/topics/topics_2)

などをご覧くださる。

(総合研究所研究員 岡崎秀磨)